と思つての輕い心臟のおどり、それは嘗てニューヨーク、ロンドン、パリを初めて見る直前に經驗したと同樣の落着かなさと心臟の鼓動とである。

アヂス・アベバの近くに小さな火山性の丘陵があり、その中に洞窟があり、土人が之れを住居に利用して居るのを見る。所は異れど、嘗て北米クリフ・ドゥエラー（Cliff-dweller）の遺跡や、佛蘭西中央高原中の火山性洞窟が居住に利用せられたのと全く趣きを同じくする。

六時三十分終にアヂス・アベバ驛に着く。驛は佛蘭西人技師の設計になるもので一部佛蘭西人は大分自慢の樣であるが、そう自慢する程立派なものでもない。又實際そう立派ではない方がよい。アビシニアには却つてその方が似つかはしいから。

稅關の檢査も、旅券の檢査も共に極めて簡單である。唯何と云ふ混雜と不秩序とであらう。先日ヂブチで見たと聊かも異る所はない。而して今や自分が此の混亂と無秩序との渦中にあるのである。眞に文字通りの渦中である。

幸、帝國ホテル（Imperial Hotel）と云ふ旅館の主人に捕まつた。彼れは希臘人であるが、早くも自分が日本人であることを知り獨りでに自分を外交官と決めて仕舞つたらしい。稅關も旅券檢査所も唯威張り散らして通つて行く。出迎の自動車に乘ると到底も御世辭を振り撒いて仕方がない。此のよい土地に一人の日本人も居ないと云ふことは殘念である、日本人の樣に商買上手な人間が一軒の商店をも持たぬのは遺憾である等勝手な事を云ふ。

伊太利ところ〴〵（二二）

瀧川規一

【ダンテとプレートの愛の哲學】　ダンテの完き喜悅と武士道の中世的戀愛と希臘式男性友愛との三巴の關係を說明せんとする氣持を起したのはベアツリチエの家を訪れダンテの生家を訪

れた爲めである。古代希臘の友愛的精神に就いては既に述べた。今茲に哲學化された希臘式友愛を述べんとする。事哲學に關しプレートと云ふ大哲人の所說であるが故に別に專門家があり門外漢たる者の筆にすべき筋合ではない。それと知りつゝも茲に概說を敢へてする所以は論理の階梯として一足飛びに結婚し得ざるダンテの愛人ベアツリチエにまで論法を進めることが出來ないからである。さうでなければベアツリチエを抹殺しなければならぬ。

大哲人プレートの愛の哲學を知らんとするには是非共フエドラス（Phaedrus）とシンムポージアム（Symposium）の二書を讀まなければならぬ。希臘的友愛と武士道的戀愛は何と云つても異常なる心理的經驗たることを失はない。其類似點を求めその差異を比較して人心を熱狂せしめた情熱の眞相を探り得れば所期の目的を達するのである。

希臘ドリア民族の武士道に於ては愛の能働者を「鼓吹者」と稱し愛の受働者を「聞き手」と云つたことは既に述べた。希臘に於ては少年に慣習を敎へ武藝を鍊り身體を鍛へ音樂を敎へて少年を指導するのは大人の義務であつた。プレートも亦この成人の少年に對する義務關係を假定してゐる。ソクラテスは既存の道德心、熱狂心、情緒を指導し更に高めて希臘人の至高情緒の形式を作らんことを求めた。ソクラテスは對話の初の部分によると成人が有する少年に對する友愛は狂氣の沙汰であるか然らざれば神聖なる熱狂である。この友愛は豫言者詩人等を鼓吹する靈の焰と異る處がない。

人間の靈魂は恰も戰車の馭者に譬ふべく、羽翼を有する二種の馬を馭してゐる。二種の馬の一は貴き種類の馬であり他の一つは賤しき種類の馬である。靈魂は理性と寬大なる衝動と肉慾との三要素より成る過去の生活に於ては靈魂は諸神と交り、神性の眞髓を表現する三德、即ち美、智、善の三德を見る、然るに靈魂が天界を彷徨する間に肉慾の軍馬の爲めに地上に曳き下ろされ、やがては肉の形體に入り羽衣を失つた

天女の如く天界に翔飛すべき羽翼を失ふに至る靈魂が營む地上の生活は只現實の影によつて見舞はれた暗黑の洞窟の如きものである。地上の生活を餘儀なくされた靈魂は墜落し來りし天界及び過去に於て享樂せし光輝ある神の幻影を時々想ひ出す。人間は眞善美の輝しき立派さを凝視することが出來ない。地上には眞善美を體現するものがあつて、靈魂を感動せしめ靈魂をしてこの三德を渴仰せしめ以て靈魂に羽翼の再生を促し神の許に立ち戻るべく向上の道を辿らしめる。愛人は自らの情熱を喚起せしめるが如き人間を見、靈魂の向上の機會を得る。人間の肉體は美が最明かに輝く地上の物體である。これまではソクラテスの見解である。プレートは更にこのソクラテスの言說を補足してゐる。プレートの云ひ分は斯うである。若人に對する愛情と結び付いた哲學は高等なる靈的生活を得る最確かなる方法である。理性は美の有する神聖な本質を認め、心に寬大なる衝動を起さしめ肉慾を撓めて愛の狂熱を利用して敎化の手段とする。熱愛する二人の友は親密にして且つ適度なる友愛の羈絆に結合される。斯くて兩人は共に智慧を增進せしめ自制と知的啓發とに精進する。斯る友愛の兩人は天界に飛翔する旅を準備をしてゐるのである。

斯して生の終焉が來る時彼等はオリンピアの勝利の一を得て飛翔し得るのである。如何なる人間の訓錬と雖も或は神の靈感と雖もこれ以上の祝福を人間に與へることが出來ない。若し彼等が肉感主義に墮し羽翼を奪はれつゝ猶も高翔を熱望して生を終る時は愛と狂氣の報酬を得る

シムポジアム中にはソクラテスは賢明なる婦人ヂオチマ(Diotima)の敎訓を述べ、男性友愛よりも高き調子を假定し更に崇高なる飛翔を述べてゐる。愛の神は兩親より或る一物を繼承し貧困と工夫とによつて生れた小供である。愛神は所有物を有せざるも凡ゆる事物を得る才智を有してゐる。愛の神は美に觸れる時に增殖の慾望を起す。若し人間の愛人の肉體のみが愛の神の繁殖性を有するとせば愛の神は婦人に行き小

供を産ましめる。若し靈魂のみが愛人の性質に存する主なる增殖要素なる時は愛の神は身心美しく高尙にして敎養ある若き男兒に向ふ。而して美少年の精神に高き思想と寬大なる情緖と云ふ精神的な不朽の子孫を産む。フェドラスにても同樣のことを述べ、愛の神聖なる熱狂は靈魂をして眞理の域に旅立たす動力なりと云つてゐる。斯くて愛人は美しきものによつて引き付けられ美を明に表はして居る一靑年に先づ自らを捧げる。然し次に凡ゆる美しき形體に存する美は一個の性質に過ぎぬことを看取する。更に進んで、知的美は肉體美に優ると云ふ確信を得る斯く漸次に進んで一個の體系的科學的見解に到達し、到る處に美の科學を見出す。遂には三つの屬性眞善美の一たる美の許にその神性を崇拜するに至る。必竟するに愛は詩及び豫言の如く神より賦與された賜物であつて、この才能あるが故に人々は日常生活の卑俗から去り、この才能の善用によつて人間としての凡ゆる卓越性優秀性の秘訣を得る。それが爲めに肉感的な穢土に沈落する情熱は光榮輝く熱狂的渴仰となり所謂羽翼ある光彩となる。これあるが爲めに人間は永久不變の堅實性を冥想して人間の靈は神と融合する。これ實に深きエロスの神の神秘の敎示である。この神秘の愛經に關して吾々の注意す可きは婦人に對する愛が嚴重に且つ明白に除外されて居ることである。プレートの定義によると、現世に於て完全至高の形に達した靈魂は瑕瑾なき獻身を以て哲學を追求した者の靈魂である。その靈魂は若き男兒に對する熱情と眞理の追求とを結合せしめた者の靈魂である。これが所謂プラトニック・ラヴの主要條件である。

【中世歐洲の武士道】　ダンテ及びペアッリチエに到る愛の課程の第二は武士道即ち英語のChivalryのことである。共通の精神的熱狂によつて中世の人々を結束する一つの理想である。試みに史を辿つて人種的にこの理想の存在を探つて見る。史家タシタス(Tacitus)の所說によれば獨乙諸民族は純潔にして貞操を守り、自ら課する法律を遵奉し、眞理を尊重し忠勤を勵み

利害よりも名譽を重んじ、偶像崇拜に至るまで婦人を崇敬したと云ふ。若き騎士が高尚なる生活に身を献げるに至つた武士道的情緒も必竟するに獨乙諸民族の是等の性質によつて培はれたのである。また同史家の說によればチユートン族はその習慣として一種の儀式を行ひ神聖なる義務を課し若き戰士を飾るに楯と槍とを以てしたと云ふ。基督敎の傳播と共に漸次洗鍊を經て十二世紀に至つて騎士の通有性なる諸德が確立さるるに至つた。眞の騎士は無私にして謙抑、柔順であり弱者を助け理想を念とし武士の情とも云ふべき優しさを有し他を赦すに敏にして慈悲を示すに速である。アーサ王の物語に於てはこれ等の武士道精神の諸要素が歷然と現はれて居る。アーサ物語中にある圓卓の騎士の一人は「死來らば死を迎へん。然れども吾が誓言吾が名譽、吾身に起り來る冒險と吾が婦人の愛は棄てず」と云つてゐる。この簡單なる言葉は當時の武士の態度を表明するものである。アーサ王がカメロット(Camelot)の宮廷に於て嚴肅なる集會を開き配下の騎士を撰定した時騎士の守る可き義務を定めた。その課した義務は「暴行殺人をなさず叛逆を避け殘忍な行爲を決してなさず求むる者には慈悲を垂るべし若しこれを履行せざる時は臣節の誓を棄つ可し。婦人に對して援助を與ふべし然らざれば死に處せらるべし。利慾の爲め或は故なくして喧嘩及び鬪爭をなすべからず」と云ふのである。これは騎士等が喜んで誓つた義務であつて每年聖靈降臨祭の日に老若共に誓を繰返へした。基督敎は十二三世紀頃の武士道の精神に喰入つた。從來は武士道の愛の對照は男性美に限つてゐたのであるが、いつの程か基督敎の處女にして母性たるマリアの崇拜と結びつくやうになつた。マリアによつて抽象的な女性は先づ天界の王座に登つた。次に一般女性が地上の憧憬渴仰の目的物となつた。無理からぬことである。

神の名とマドンナの名とが騎士の唇では結合した「神と吾が母」(Dieu et ma Dame)は武士道のモットとなつた。斯くて愛は凡ゆる氣高

さと德と、英雄主義と自己犧牲の源泉となつた。アーサ王の旗下の騎士サア・トリストラム(Sir Tristram)は「若し騎士にして愛人ならば勇敢を缺くことなかる可し」と云つた。この精神は希臘人が男性的友愛を以て勇敢なる行爲の原動力となし、以て或は暴君を倒し或は母國の解放をなし遂げた精神と相照應してゐる。

茲に注目すべきは武士道的愛はたとへ女性を對照としても全然結婚抜きの愛情である。騎士が崇敬し奉仕し、騎士によつて奉仕されその献身に報いた婦人と雖もその騎士の妻たることを許されなかつた。其婦人は或は處女であり或は既婚者であつてもよかつた。史的事實より見るに斯る婦人は大抵實際は其騎士に婚せず他に婚してゐた既婚者であつた。騎士と其目標たる婦人との愛は決して兩者直接の結婚を許さなかつた。この點が注目すべき重要點である。封建的宮廷では結婚せる兩人の間には愛はその力を發輝する能はずと宣言された。こゝに於て吾々はダンテ及びベアツリチエを訪問した時案内者の口吻たる「妻あるダンテがベアツリチエに戀した」の一言及び「左程理想化した婦人ならば何故にダンテはベアツリチエと結婚しなかつたか」との屢〻繰返へされる後世人の疑問に答へ得る。成程ベアツリチエの死後ダンテは結婚したが結婚後猶ベアツリチエはダンテの精神的指導者であつた。この事實に對しては精神的な中世武士道愛の歸趨を以て答へたいと思ふ。中世武士道の愛と古代希臘人の愛と相似通ふ點をもつてゐるプレートもシムポジアム中に、彼が語つてゐる高尚なる愛は野卑にして價値なき結婚愛とは何等の關係がないと宣してゐる。後世ならば結婚關係の全然不可能なる人間によつてのみこの種の愛情が惹き起されると云ふであらうが、史實として在存した彼等のこの種の愛は精神の一狀態であつた肉の慾求ではなかつた。人間としての弱點が肉感的たらしめたかも知れぬが其れは彼等の理想ではなくて理想を外れた過失であつた。過失を理想と混同することは勿論出來なかつた。子孫繁榮を期し家庭に於ける日常生活と

云ふ面倒を有する肉的愛情と既述の國家社會に利益をもたらす愛情とは何等の關係がなかつた現實に於て軌道を外れた者があつたにせよ理想としては希臘の武士道的友愛も中世の武士道的愛情も純眞なる靈的熱情であつて、これによつて愛人の心から凡ゆる下卑なる考を淨化し肉慾の羈絆を免れしめ永續的歡喜を得せしめたのである。

プレートは愛を狂（mania）と云ひ一つの吹き込まれた逆上であると云つたが、佛蘭西南部のプロヴアンス（Provence）ではこの高き歡喜を喜悅と稱へてゐた「アーサの死」(Morte Darthur)の物語では兩騎士ランスロット(Lancelot)及びトリストラムが各自らの婦人を運び込んだ城は「喜びの砦」(Joyous Gard)と呼ばれた。この喜悅の結果は勇敢と禮儀、元氣と忍耐の持久力、危險なる冒險の愛好となつた。熱狂的愛の眞髓に浸潤した騎士の魂は凡ゆる危險を物ともせず至難の事業を企て汚辱と困窮に耐え嘲笑侮蔑誤解とを忍び婦人よりの冷遇と蔑視をさへ忍ぶに優しき平靜と昂然たる忍耐とを以てした。フエドラス中に說かれたプレートの所謂愛は騎士の熱狂であるロマンチックな理想と合致する狂と呼ばれようが喜と呼ばれようが本質に於て同一でありこの狂喜を惹き起す對照物が希臘の如く少青年であらうと中世歐洲の如く既婚婦人であらうと問題でない。さりとて希臘の武士道愛も中世の武士道愛も結婚を全然排斥禁止してゐるのではない。禁止してゐたのは當事者間の結婚である。ランスロットもトリストラムも各別々に結婚してゐる。其にも拘らず兩人は夫々ギニヴィア（Guinevere）とイソルト（Iseult）と云ふ婦人を愛の對照となした。誰かがアーサ物語を讀んでこの件に至り妻君は常に柴角を繁らしてゐたであらうと云つた。其は餘談であるがダンテは既述の如く妻を娶り小供を儲けた。詩人ペトラーク(Petrarch)は娼婦によつて小供を生んでゐる。それにも拘らず兩詩人は夫々ベアトリスとラウラ（Laura）とを愛の對照として聖なるベアトリスと呼び、得難きラウラと稱へ

た。兩婦人は斯くして詩人の崇敬を受けその藝術を鼓舞し靈感の源泉となつた。

【ツルバヅール】 ダンテ・ベアツリチエの精神的戀愛に至る第三階梯として中世武士道の戀愛氣分を其實際に徵して理解する必要がある。それには南佛ラングドック（Languedoc）及びプロヴアンス（Provence）の兩方に居つた詩人の群の大體の行動を知らぬばならぬ。彼等はツルバヅール（Troubadours）と總稱されてゐる。彼等はラング・ドック（langue d'oc）語にて叙情詩を書いた。北佛にも同樣の詩人の群があつてこれをツルヴエール（trouvère）と總稱しラング・ドイル（langue d'oil）語を用ひた。今は前者に就いてのみ述べる。彼等は繁榮した南佛及び西班牙伊太利の一部に於ける諸王侯の宮廷の文化を代表してゐた。彼等の用ひた詩形は後に述べるが如く種々複雜し形式であるが五絃の琵琶に似た樂器をバイオリンの如く持ち弓にて鳴らし自作の詩を歌つた。彼等のうちには社會的地位が高い者もあつた。

ツルバヅールの過半數は貴族階級に屬して居り二十三人は君主であつた。是等の王侯貴族は富裕にして獨立生活を營み得たが、爾餘のものはこれに反し歌を歌ひ詩を作ることを以て職業とし城から城へと歷訪を重ね貴婦人の私室から私室へ參候した。然しながら彼等は社會的に影響を及すこと著しく、其の影響の甚大なること中世史に類を見ない程である。彼等は言論の自由を持つてゐたのみならず弊風を非難する特權すら持つて居た。時には地方の政治問題にも容喙した。また宮廷に奉仕する貴婦人等は彼等の影響を受けて修養をなし交歡の雰圍氣をも作つた。彼等は旅行に際して屢〻一人の弟子或は奴僕を伴つた。この弟子若くは奴僕をジョグラ（Joglar）と呼んだ。其職務は主人の世話をやき主人の歌ふ歌に伴奏することであつた。

この弟子は最初から社會的階級が低くあつたが時には主人の詩人のなすが如く自ら歌を作つたことがある。斯る場合は主人はその混同を喧しく責めツルバヅールとジョグラの區別は嚴格

に區別された。然しながら人間の有する自然の才能は人爲的な障壁を破ることが屢ある。ジョグラの階級から本業のツルバヅールを凌ぐ名人が出でて遂にはツルバヅールの位置に進んだものもあつた。この新進のツルバヅールの伎能は世の歎賞を博しその作品及び言行は宣傳され時には假空な物語を以て潤飾さへされて後世に遺つた。

ツルバヅールの全盛期を通じて世に認められた詩人は四百人ばかりあつた。未刊の原稿のまゝでこれ等の詩人の傳記の遺つてゐるものが百十一人ある。既述の如くツルバヅールは主として佛國南部の詩人である。ツルバヅールには傳記が傳はつて居り佛國北部に居つた詩人の群ツルヴェール(Trouvères)に就いては傳記の傳はるものが尠い。

當時既にツルバヅールの生きた傳記は記錄するに値すると考へられたらしい。のみならずツルバヅール自らが傳記集を作り傳記作者を以て自任した者も居つた。サン・キル(S. Cyr)のウック(Uc)と云ふ詩人は略一二〇〇年から一二四〇年迄生存して居つた詩人であるが彼自ら善良なる男女の言行に興味を有つと云つてゐる。十四世紀の初には原稿の傳記にさへ詩人の傳が附加されてゐた。また自作の詩に註釋を作つたものも、他人の詩に註釋を加へたものもあつた。これ等の事實より、プロヴアンスの詩は夙に批評的に鑑識されて居り、且つ詩作が遊戯的でなく眞劍であつたことが窺はれる。

ツルバヅールが最屢〻用ひた詩形はシルヴアンテ(sirventés)と呼ばれる。後世の研究の結果この語義傭兵の意であると云ふ。長い折返句をもつ詩形をツルバヅールはバラダ(ballada)と云ひ、その他パスツレラ(pastourella)と呼ばるる詩形、アルバ(alba)と呼ばるる詩形がある。アルバとは曉の義であるが一篇の歌の各節にアルバの語を繰返へされるが故に命名されたのである。これが朝の歌とすれば後の發明に係るセレナ(serena)は夕の歌である。プラン(planh)と稱せらるるものは挽歌でありトンソン(tenson)

と稱せらるゝものは叙情的對話詩であつて二人が愛情の道義を論ずるか時には宗教的哲學的若くは精神的問題を論議するのである。ツルバヅールの作つた詩歌は主として叙情詩である。

ツルバヅールの古典期は一二一〇年まで續いたのであつて、佛蘭西南部の貴族等が全盛を極めた時期と一致してゐる。貴族等の富と武士の教養的趣味は平和の持續すると共に彼等をして法外なる酒色に耽けらしめ彼等は狂氣じみた出費をさへ意としなかつた。この雰圍氣の續いてゐた間は詩人等は直接の利益を得てゐたが、反動が起つて來てツルバヅールの衰弱と破滅とを來たした。その大原因は羅馬と異端との爭鬪でありその結果遂に一二〇九年六月に實際の戰爭となり法王インノセント(Innocent)三世の命により佛國北部の貴族等が合同して十字軍を起し異端のアルビゼンシス教徒(Albigenses)を襲ひベジエル(Beziers)及びカルカソンヌ(Carcassonne)を掠奪した。ツルバヅールの庇護者たりし多くの貴族は自ら異端信者でなくとも異端を寛待した人々であつた。爲めに貴族等は異端の根絶さるるや運命を共にした。詩人自らは直接に攻擊されたのではない。またその藝術は眼前の宗教的覆滅の爲めに直に滅ぼされた譯ではない。戰爭の結果ラング・ドック地方は荒廢し一二一八年のツールーズ(Toulouse)の包圍に於て荒廢は最頂點に達した。異端に加擔してゐた南佛の宮廷の滅落は最初ツルバヅールをして暗黑の世界を感ぜしめ、益々陰慘なる空氣を作り果は自暴自棄に陷らしめた。更に詩人等の息の根を止めるに至らしめたのは宗教裁判所の制定と宗教々團(Order)の設置であつた。プロヴアンス及びラングドック地方の溫い文化の社會は急速に野蠻の世に戻り詩人を迎へるべき場處は何處にも見出すことが出來なくなつた。是等諸詩人の略歷を一瞥する時詩人等の理想愛及び墮落の經緯を知ることが出來る。斯くて理想と過失の表裏を見るのである。